



THINK × ACT
KANSAI
UNIVERSITY

CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning
Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

March 2011

vol. 05

「自校教育」に思う

教育開発支援センター長
化学生命工学部教授 池田 勝彦

現在、多くの大学において、初年次教育のカリキュラムの中に自校教育が組み込まれている。その多くは、大学の建学の精神や歴史・今後の展望等、いってみれば大学の「これまで・いま・これから」を、入学したばかりの初年次学生に伝えるものであり、学生に大学への帰属意識や愛校心を持たせることを目的としているもののように思われる。

昨年末の12月22日に、自校教育をテーマにした寺崎昌男先生の特別講演会が、学内において行われた。この講演会は本学の全学共通教育K群科目の「関西文化圏と関西大学」の特別講義として開催されたこともあり、会場には多くの学部学生の姿を見ることができた。講演のテーマとしては「『自校教育』とは何か -「自分は今どんな大学にいるのか」この大切な問いにむかって-」であった。実践者であるだけでなく自校教育そのものの提唱者であられる寺崎先生ならではのテーマ設定である。寺崎先生がこれまで立教大学で実践されてきた自校教育の歩みとその内容について、事例を交えつつのご講演であった。

寺崎先生のお話の中で、筆者にとって特に印象に残ったのは、自校教育を行うことによって大学が在籍学生にとっての「安心できる居場所」となり、また卒業生にとっては「安心できる寄港地」となるという点である。

自校教育に関してよく耳にすることとして、「自校教育を行うことは、学生の内面にその大学の学生であるというアイデンティティを形成し、それは良いことである。よって必修化すべきである。」といった

類のものがある。これはあくまで私見ではあるが、軽い違和感を覚えてきた。大学に入学したすべての学生にとって、その大学の学生であるというアイデンティティは果たして必須なものであろうかという疑問からくる違和感である。いいかえるなら、学生が大学以外の何かにアイデンティティを求めそこに拠って立つことがあってもよいのではないか、大学に入学したからといってすべての学生が全く同じアイデンティティを持つことを必須にすることが必要なのだろうかという違和感である。

そこへいくと寺崎先生が講演中におっしゃった、自校教育を行うことが学生や卒業生にとって大学を「安心できる居場所」で「安心できる寄港地」にするということであるならば、なぜ自校教育が重要なのかについて非常に腑に落ちる思いであった。つまり、自校教育を行うことが、将来へのキャリアパスを模索しアイデンティティを形成する苦しみに悩む学生にとって「安心して」軸足を置くことができる場所へと大学を変化させるのである。そういう視点からであるならば、昨今の学生を取り巻く現状を思うにつけ、自校教育の重みについて感じ入った次第であった。

本学においても、自校教育を目指した科目が全学共通教育科目のK群科目の中に設定されている。それらの科目について、学生が在籍大学をよく理解し「安心できる」場所と感じることが可能となるものであるかどうか、粘り強く検討・改善を続けねばならない思いを新たにされた講演会であった。